

ねん がつ にち
2021年8月14日

せいぼ ひしやうてん
聖母の被昇天

きくち いさおだい しきやう
菊地功大司教 メッセージ

「ともに手をとり合^てって、友^あ情^{ゆうじやう}と団^{だん}結^{けつ}のある未^み来^{らい}をつくろうではありませんか。窮^{きゆう}乏^{ぼう}の中^{なか}にある兄^{きやうだい}弟^{だいに}姉^し妹^{まい}に手^てをさし伸^のべ、空^{くう}腹^{ふく}に苦^{くる}しむ者^{もの}に食^{しょく}物^{もつ}を与^{あた}え、家^{いえ}のない者^{もの}に宿^{やど}を与^{あた}え、踏^ふみにじられた者^{もの}を自^じ由^{ゆう}にし、不^ふ正^{せい}の支^し配^{はい}するところ^{ところ}に正^{せい}義^ぎをもたらし、武^ぶ器^きの支^し配^{はい}するところ^{ところ}には平^{へい}和^わをもたらそうではありませんか。」

ねん がつ にち きやうこう にせい ひろしま へいわ
1981年の2月25日、教皇ヨハネ・パウロ二世は、広島での平和メッセージのなかで、特^{とく}に若^{わか}者^{もの}に対して呼^よびかけ、そのよう^のに述^のべられました。

イデオロギ^いーの相^{そう}違^いから来^{きた}る東^{とう}西^{さい}の対^{たい}立^{りつ}が深^{しん}刻^{こく}となり、全^{ぜん}面^{めん}的^{てき}な核^{かく}戦^{せん}争^{そう}の可^{かの}能^{のう}性^{せい}も否^ひ定^{てい}で
きなかつた時^じ代^{だい}に、教^{きやう}皇^{こう}は「戦^{せん}争^{そう}は人^{にん}間^{げん}のしわざです。戦^{せん}争^{そう}は人^{にん}間^{げん}の生^{せい}命^{めい}の破^は壊^{かい}です。戦^{せん}争^{そう}は死^しです」と、広^{ひろ}島^{しま}の地^ちから力^{ちから}強^{づよ}く宣^{せん}言^{げん}されました。

それから 38 年後^{ねんご}、同^{おな}じ広^{ひろ}島^{しま}の地^ちから、教^{きやう}皇^{こう}フ^ふラ^らン^んシ^しス^すコはこ^こう呼^よびかけられました。

「だからこそわたしたちは、とも^{あゆ}に歩^{もと}むよう求^{もと}められているのです。理^り解^{かい}とゆるしのまな
ぎしで、希^き望^{ぼう}の地^ち平^{へい}を切^きり開^{ひら}き、現^{げん}代^{だい}の空^{そら}を覆^{おお}うおびた^{くろくも}だしい黒^{なか}雲^いの中^{なか}に、一^{いち}条^{じやう}の光^{ひかり}を
もたらすのです」

人^{にん}間^{げん}はいのちの危^き機^きを避^さげるた^めに、「友^{ゆう}情^{じやう}と団^{だん}結^{けつ}」のう^うち^ちに、「とも^{あゆ}に歩^{もと}む」こ^ことを
通^{つう}じて行^{こう}動^{どう}できるはずだと、教^{きやう}皇^{こう}た^たちは広^{ひろ}島^{しま}から平^{へい}和^わのた^ため^めの行^{こう}動^{どう}を求^{もと}めて声^{こえ}を
上^あげまし
た。

きやうこう
教^{きやう}皇^{こう}フ^ふラ^らン^んシ^しス^すコは、「フ^ふラ^らテ^てリ^り・ト^とウ^うツ^つテ^てイ」にこ^こう記^{しる}します。

「予^よ期^きせ^せず新^{しん}型^{がた}コ^こロ^ろナ^なウ^うイ^いル^るス感^{かん}染^{せん}症^{しょう}のパン^おデ^よミ^みックが押^おし寄^よせ、わたしたちの偽^{いつわ}りの
安^{あん}全^{ぜん}を露^ろ呈^{てい}しました。・ ・ ・ 共^{きやう}同^{どう}での行^{こう}動^{どう}が取^とれな^あいこ^あが明^あら^かにさ^かれまし
た。過^か度^どに

つながりがあるにもかかわらず、わたしたち全員に影響する問題の解決をいっそう困難にする分裂が存在しました。・・・わたしたちが生きるこの時代に、一人ひとりの尊厳を認めることで、兄弟愛を望む世界的な熱意を、すべての人の間によみがえらせることを、わたしは強く望んでいます。(7,8)

神の秩序が確立された世界、すなわち平和を求めて、国際的な連帯が不可欠であることが浮き彫りになりました。残念ながら、「友情と団結」のうちに、「ともに歩む」連帯は、実現していません。

聖母被昇天にあたり、ルカ福音は、聖母讃歌「マグニフィカト」を記します。聖母マリアは、全身全霊をもって神を褒め称える理由は、へりくだるものに目をとめられる主のあわれみにあるのだと宣言されています。

すなわち、人間の常識が重要だと判断しているあたり前の価値観とは異なっている、神ご自身の価値観に基づいて、自らが創造されたすべてのいのちが、一つの例外もなく大切なのだと言うことをあかすため、神は具体的に行動された。そこに神の偉大さがあるのだと、聖母は自らの選に照らし合わせて宣言します。神ご自身の価値観は、「思い上がるものを打ち散らし、権力あるものをその座から引き降ろ」して、排除された人々を兄弟愛のうちに連れ戻す価値観であり、まさしく「友情と団結」のうちに、「ともに歩む」連帯に支えられています。

教皇フランシスコは、「ラウダート・シ」の終わりにこう記しています。

「イエスを大切になさった母マリアは、今、傷ついたこの世界を、母としての愛情と痛みをもって心にかけてくださいます。・・・天に上げられたマリアは、全被造界の母であり女王です。」(241)

聖母の悲しみに心をとめ、その取り次ぎに信頼しながら、全被造界が神の望まれる状態となるよう、神の平和の実現のために、ともに歩んで参りましょう。